

姫路市社会福祉協議会

はじめに

震災後、姫路市は阪神間との距離も平時では電車で1時間弱と比較的近いため、メディアを通じた震災状況が克明に報道されるにつれ、行動を起こすことへの心理的衝動が多くの市民に芽生えてきた。実際市社協へのボランティア活動への問い合わせも頻繁にあり、被災地へ向けた具体的な活動を起こすことができた。

平成7年4月からは各所に建設された仮設住宅への入居が順次始まった。市内には、4カ所（玉手364世帯、新白浜150世帯、御国野36世帯、南駅前19世帯）約600世帯分の仮設住宅が建設されたが、被災地から最も西端に位置する地理的条件の悪さもあり、4～5月当初は、全体でも50世帯程度の入居者で、設置された世帯数に達しないのではとの危惧もあったが、徐々に入居者も増加してきた。入居者は、抽選をされた高齢者・障害者が優先されたものではなく、希望すれば順次入居できたので、比較的若い世帯も入居している。平成7年度当初は、市社協への情報もほとんど無い状態でのスタートとなった。実際に市社協として関わり始めたのは、仮設住宅入居世帯数が100世帯を越えた7～8月頃からである。

1. 玉手・新白浜仮設のふれあいセンターの設置

100世帯を越える仮設住宅へ設置される「ふれあいセンター」は、玉手・新白浜の2仮設で設置されることとなり、「ふれあいセンター運営協議会」の設置に向けて市社協が中心となって地元団体と仮設内住民による調整を行い、8月に運営協議会が発足した。

2. ふれあいセンターの運営と行事の開催

ふれあいセンターの運営が具体的に始まると同時に、仮設住民へのふれあいセンターのPRも兼ねてセンター開所式を実施することになった。玉手仮設は9月30日に、新白浜は10月1日にそれぞれ式典を行い、うどん・みたらし団子等の模擬店を出店し、住民への啓蒙を行った。当日は、市社協から依頼した企業、学校、一般参加のボランティア約50名の協力があり、住民との交流も行われた。

また、四季を通じて様々な催しを企画し、クリスマス会では児童を対象にした催しを行い12月31日には年越しソバを、3月3日はお雛祭りに合わせてちらし寿司を振舞うなど、地域と仮設住宅との繋がりが序々に出来ていった。

このような取り組みは、ふれあいセンター運営協議会の主催による行事であるが、実際は仮設住宅自治会が中心になって企画・実施をしており、企画の仕方や事務処理等において市社協が側面からの援助として深く関わっている。

3. 社協支部と仮設住宅との関わり

玉手仮設住宅がある荒川小学校区は、以前から小地域福祉活動が活発に行われている地域である。仮設住宅内に老人クラブが結成されたのをきっかけに、まず最初は地域老人クラブとの交流が始まった。地域老人クラブが活動する時には、仮設住宅のお年寄りにも声をかける等、地域にとけこんだ交流ができていく。

ふれあいセンター運営協議会の構成メンバーは、地域団体から自治会・婦人会・民生委員・老人クラブの各会長が理事として参画しており、運営についての側面的援助を常時行っている。そのような活動から、社協荒川支部の活動の一環として、ひとり暮らし老人を対象とした「ふれあい食事サービス」を仮設住民の対象者にも広げていくことになり、ふれあいセンターを利用して平成8年3月から対象者20名で月1回継続実施にこぎつけた。

新白浜仮設住宅の設置地域は、けんか祭りでも有名な白浜小学校区にある。従来からの地域団体は、祭りを中心とした結束が強い特色があるが、仮設住宅が設置されている地域は地域内では新興住宅地になるため、地域住民との交流が比較的スムーズに行われている。

一方、地域団体の結束が強い特色として、いわゆる面倒見のよい地域のため仮設住民への配慮も十分行っており、ふれあいセンターの運営についても地域団体が主になって行っている。

4. 仮設住宅に関わるボランティアグループとの連携

仮設住宅への入居が始まると、まず被災地で活動していた「心のケア」を市内の仮設住宅でも行い始め、それをきっかけにして個人からグループ化された。また、大学で組織された教授・学生のボランティア、コープこうべの主婦を中心としたボランティア等のグループが活動を開始していった。

平成7年7月にこれらのグループが「玉手仮設ボランティアネットワーク」を結成し、夏祭りを企画・実施することとなった。仮設住民が楽しめる一時を過ごすことを目的にバザーや模擬店、盆踊りなどを行うことになり、備品の調達や資金面での相談を受けたのをきっかけにボランティアセンターとの関わりができてきた。

以後、市社協ボランティアセンターとして、仮設住宅に関わるボランティアグループの把握と情報交換、連携を目的にグループの現況調査を実施し、玉手仮設のみならず市内で活動している震災に関わるボランティアグループの実態をつかんでいった。意外に多

くのボランティアグループが存在し、実際の連携や情報交換を行うために10月から月1回定期的な連絡会議を開催し、現在も継続して行っている。

連絡会議では、市社協が持っている情報をグループに提供したり、1グループが企画した行事に他のグループの参画を呼び掛けたり、グループの抱えている活動に対する悩みの解決に向けた話し合いなどが行われ、毎回有意義な話し合いが行われている。

この会議をきっかけに、仮設住民が冬の寒さの中で隙間風に震えているとの情報が入り市社協の呼び掛けによって、希望されている方を対象に隙間風を防ぐ作業を行うことになった。12月17・23日の2日間にわたり、これまでのグループ間の連携によって多くのボランティアの協力を得ることができ、玉手、新白浜仮設の計40世帯の隙間風を防ぐことができた。

グループの活動は、老人世帯を中心に個別訪問を実施し、震災による悩みの相談や話相手になっている目立たないが重要な役割を担っているグループがあったり、毎週定期的にお茶会を開き、手作りのケーキやお菓子を振舞っているグループもある。不定期ではあるが、夏祭りや小旅行を企画・実施するなどのグループや、家屋の修理やちょっとした大工仕事などを行っているグループもある。



(天井のすき間にガムテープを 新白浜)

まとめ

仮設住宅の支援は、息の長い活動になる。特に力のある世帯は仮設住宅から順次転居しており、高齢者・障害者等の社会的弱者が留る傾向が今現在もでてきつつある。

今後、社会福祉協議会のみならず、行政や専門機関との連携を密にし、生活の自立支援を目標に意気の長い活動を継続していく必要がある。

事業概要表

	事業名	事業概要	8年度への課題・展望
交流 促進 事業	ふれあい食事サービス	ひとり暮らし老人を対象に、ふれあいセンターを使用して会食会を実施。調理、配食は校区ボランティアが担当	会食人数の増加をめざす。
	住民親睦行事	年齢を問わず、住民対象の1日親睦小旅行の実施	住民間の交流が出来たため、8年度も積極的に実施する。
	季節行事の実施	クリスマス、もちつき、ひな祭り等に合わせた行事の実施	住民自らの企画を取り入れる
生活 支援 事業	ふれあいネットワークの拡充	安否確認、電話訪問等の実施	社会的弱者への関わりの強化
V コー ディ ネー ト	グループ連絡会議	震災関係のボランティアグループの定期的な連絡会議の開催	
	個別依頼の調整	ボランティアの支援依頼があれば、随時調整をする。	

専門 機関	心のケア対応連絡会議	保健所主催の被災者対象こころのケアに関する連絡会議（保健婦、精神保健相談員、ケースワーカー、医師、社協）	
連携 事業	仮設住宅連絡会議	市企画課主催の市関係各課の連絡会議（民生保護課、児童課、障害福祉課、高齢福祉課、住宅管理課、企画課、保健所、社協）	

ふれあいセンター状況

(1996. 4. 1現在)

地区名	仮設 数	開所月日	開設日数 (週)	運営委員の構成	主な事業内容	社協の関わり
荒川地区 (玉手仮設 住宅)	364	H. 7. 9. 1	週6回 (木曜日 休み)	地区自治会会長 地区婦人会会長 民生委員校区代表 地区老人クラブ会長 社協荒川支部長 仮設住宅自治会役員	1. センター開所式 2. クリスマス会の開催 3. ひな祭りの実施 4. 社協支部食事サービス事業の実施	1. 社協がボラン ティアを依頼、企 画、実施を主導 4. 支部と仮設との 調整
白浜地区 (新白浜仮 設住宅)	150	H. 7. 9. 1	週7回	地区自治会会長 地区婦人会会長 民生委員校区代表 地区老人クラブ会長 仮設住宅自治会役員	1. センター開所式 2. ふれあい喫茶の開店 3. クリスマス会の開催 4. 住民親睦交流事業	1. 社協がボラン ティアを依頼、企 画、実施を主導

ふれあいセンター全体にかかわる成果と課題

<p>【成 果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域住民を含め、多くのボランティアがセンターを利用し、住民の生活の潤いを作っている。 ・住民間の親睦や交流の場としての活用がなされている。 	<p>【課 題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運営する役員が固定化しているため、利用する人も固定化している傾向にある。 ・とり残されているとの感情を持つ高齢者等の支援方法が具体化できていない。
--	--